

[課程-2]

審査の結果の要旨

氏名 清水 真由美

本研究はカンボジアにおいて、Livelihood プログラムへの参加が HIV 陽性者のうつ症状、食料不足、ソーシャルサポートに与える影響を明らかにすることを目的とした。研究デザインは不等価比較デザインとし、介入群（Livelihood プログラムに参加した HIV 陽性者）と比較群（プログラムに参加していない HIV 陽性者）を比較した。分析方法としては、ロジスティック回帰分析によりプログラムへの参加とうつ症状・食料不足・ソーシャルサポートとの関連をそれぞれ検討した。また、傾向スコア法を用い、プログラム参加によるうつ症状・食料不足・ソーシャルサポートへの効果をそれぞれ推定し、以下の結果を得た。

1. 分析対象者は、介入群 357 名、比較群 328 名であった。介入群のプログラム参加年数は、46.8%が1年以上2年未満、53.2%が2年以上4年以下であった。研究参加者における女性の割合は、介入群で有意に高く ($p=0.002$)、また、食料補助を受けている割合は、比較群で有意に高かった ($p=0.035$)。年齢、婚姻区分、教育レベル、世帯人員数、世帯人員一人当たりの世帯月収、借金の有無、抗レトロウイルス療法の有無、HIV 陽性と診断されてからの期間、内在化された HIV 関連スティグマ、セルフエスティーム、ソーシャルサポート、食料不足に関しては、両群の間で有意な差は見られなかった。うつ症状を測定する尺度（The Cambodia version of the Hopkins symptoms checklist for depression symptoms scale）の点数は、比較群で有意に高かった ($p=0.046$)。
2. うつ症状は、介入群では 56.0%、比較群では 62.7%であった。また、食料不足は、介入群では 91.6%、比較群では 94.8%であった。
3. ロジスティック回帰分析の結果、Livelihood プログラムへの参加はうつ症状とは有意な負の関連性が認められた。一方、食料不足およびソーシャルサポートについては、Livelihood プログラムへの参加との有意な関連性は認められなかった。
さらに、うつ症状と負の関連性を示した変数は、一人当たりの世帯月収が高いこと、セルフエスティームが高いことであった。女性であること、内在化された HIV 関連スティグマが高いこと、食料不足を経験していることは、うつ症状と正の関連性が認められた。

4. 傾向スコア法による分析の結果、**Livelihood** プログラムへの参加は、うつ症状の低減に有意な影響をもっていることが認められた。しかし、食料不足、ソーシャルサポートへの影響は認められなかった。

以上、本論文では、これまで十分に研究されてこなかったカンボジアにおける **Livelihood** プログラムの HIV 陽性者のうつ症状、食料不足、ソーシャルサポートに与える影響を調査し、同プログラムへの参加がうつ症状の低減に効果があることを初めて明らかにした。また、カンボジアの HIV 陽性者が高い割合でうつ症状を経験していることも示した初めての研究である。本研究は、今後の **Livelihood** プロジェクトの立案・実施・普及、そして HIV 陽性者の精神保健・貧困問題の改善に重要な貢献をなすものであり、学位の授与に値するものと考えられる。